

教育センター・ニュース

Education Center, Tottori University

NEWSLETTER No. 2

第 2 号 2010 年 5 月 31 日発行

目 次

・ 巻頭言	1
・ 教育センター全体の活動（新入生オリエンテーション／学習相談／読書ゼミナール／HP更新）	2
・ 教育開発部門の活動（大学教育研究フォーラム／鳥取大学FD講演会／新任教員FD研修会）	3
・ 外国語部門の活動（CALL 新教材／平成 21・22 年度学長経費プロジェクト／英語学習HP開設）	6
・ 健康スポーツ部門の活動（スキー実習／トレーニングルーム説明会／地域貢献活動）	7
・ 教職教育部門の活動（教職教育部門の任務／教職教育に関する活動／教育臨床に関する活動）	7
・ 連載FD講座、出版案内、とりリーマン川柳、関係教員名簿	8

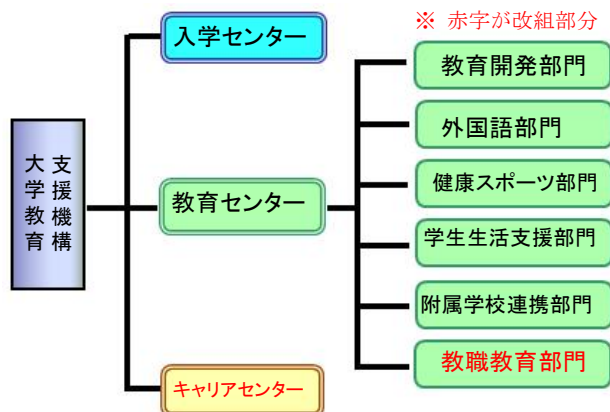
巻頭言

センター長：本名俊正

大学教育支援機構が発足して 2 年が経過しました。この間大学の内外で様々な改革が進みました。本学でも全学共通科目のカリキュラム改革をはじめ、新しい取り組みが進展しています。これらの教育改革をさらに充実発展させるために、新学期から大学教育支援機構と各センターの改組を行いました。機構を構成するセンターとして、これまでの入学センター、教育センターとともに、新たにキャリアセンターを設置し、入学、教育、卒業の各段階に対応した 3 つのセンター構成としました（＝下図）。



また、生涯教育総合センターは、生涯教育部門を産学・地域連携推進機構に、教職教育部門は教育センターに移行し、さらに充実発展することになりました。教育センターには昨年度から附属学



校連携部門も設置されていますので、これらの改革で、大学教育支援機構が鳥取大学全体の教育の実施と改革にさらに積極的に取り組む体制となりました。

本学は「知と実践の融合」を教育研究の理念として掲げ、教育グランドデザインとして、「人間力を根底においた教育」によって教養豊かな人材を育成するとしています。これまでの多様な取り組みをさらに発展させ、新たな科目として「鳥取学」、「鳥取大学学」等を開講するとともに、「読書ゼミナール」など学生参加型の授業科目や学生からの提案による授業科目を開講し、魅力あるカリキュラムの編成を推進しています。

また、すべての授業について、学生による授業評価アンケートを 15 回目の授業終了時に実施していましたが、本年度からは 15 回のうち 7 回目の授業で授業改善のための学生アンケート中間調査、15 回目に学生による授業アンケートを行い、授業改善のためのサイクルを早期に回転し、もう一歩進んだ質の高い教育内容となるよう改善を進めています。

外国語教育の改善についても各学部と教育センターで協議をし、カリキュラムの改善を進めています。

昨年 7 月と本年 1 月に、医学部医学科の 6 年一貫教育についての学生に対する調査を行いました。今後はカリキュラム編成や教育の仕組み全体を全学的に調査するとともに、改善を行うことも検討し、更なる教育の質の向上のための取り組みを推進しながら、より質の高い魅力ある教育を展開したいと願っています。

教育センター全体の活動

●新入生向け全学共通科目オリエンテーション

教育センターでは4月1日(木)・2日(金)の両日、湖山地区の各学部新入生を対象とした全学共通カリキュラムの説明会を実施しました。

地域学部は和田准教授、医学部は田畑教授、工学部は後藤・桐山両准教授、農学部は武田(元)准教授がそれぞれ分担して担当し、高等学校と大学の違い、鳥取大学の教育理念・教育グランドデザイン「人間力」の趣旨、共通教育と専門教育の関係、教養科目(基幹科目・主題科目・特定科目)の特質、履修・抽選方法と時間割の組み方、外国語科目の選択方法など、2時間近い時間をかけて丁寧に説明しました。

なお健康スポーツ科学実技の履修・選択方法については、各学部とも、健康スポーツ部門の福元教授・上野准教授が説明を行いました。

●新入生学習相談室・ふれあい朝食会学習相談

教育センターでは新入生対象の「学習相談室」を4月3日(土)終日開設しました(=写真・下)。休日返上の業務となりましたが、当日は教養科目等の抽選マークシート用紙提出日だったこともあり、盛況でした。学部別の相談件数の割合は高い順に医学部(163名中41名=25.2%)、地域学部(210名中26名=12.4%)、工学部(475名中56名=11.8%)、農学部(247名中26名=10.5%)となっており、医学部の相談件数の多さが目立ちます。相談内容では教養科目の履修方法(61.7%)抽選マークシートの記入方法(23.5%)教員免許の取得方法(7.4%)などとなっています。



また4月8日(木) - 14日(水)の「ふれあい朝食会」では教育センター主催の「学習相談コーナー」を全期間にわたって開設しました(=写真・右上)。毎朝、常時2 - 3名のセンター教員が特設ブースに待機し、合計19人から相談がありました。相談内容は教養科目の履修方法、GPA関連、専門科目についてなど学習相談室よりも多岐にわたっていました。(松本雅弘・福元和行)



●特定科目「読書ゼミナール」報告

この科目は、次の2つを主な目的として、平成21年度に初めて開講されました：①一作家の作品を多読する、あるいは一冊の本を精読することで読書力をつける、②少人数で対話を続ける中で担当教師と、あるいは受講者同士で、親交を深める。開講クラス数は前期12(受講者127名、1クラス平均10.6名)、後期14(受講者97名、1クラス平均6.9名)でした。

この授業については、これまでに3回座談会(反省会)を開き、感想・意見を交換しています。主な感想・意見として、(担当教員から)「この授業を開講してよかった、おもしろかった、意義がある」。「受講者同士、どういう考えを持っているかを知ることができる——このことを学生は高く評価している」。(学生から)「読書範囲が広がる、読書意欲が高まる、読みが深くなる」。

平成22年度は、前期17クラス、後期9クラス開講されます。総クラス数は26。これは昨年と同じですが、しかし、22年度に初めてこの授業を開講する教員が3名あります。また、22年度前期の受講者は162名で1クラス平均9.5名です。(世話役：武田修志)

平成22年度・前期「読書ゼミナール」開設一覧

「山本周五郎の世界」	(副学長：清水克敬)
「夏目漱石を読む」	(地：藤田安一)
「バカボンDの原作『宮本武蔵』を読む」	(工：小畑良洋)
「司馬遼太郎『街道をゆく』を読む」	(特任：小椋孝昭)
「考えるヒント」	(工：吉野 公)
「いかにして問題を解くか(ボリヤ著)を読む」	(教：後藤和雄)
「三浦綾子・村上龍を読む」	(工：細井・小池)
「大野晋を読む」	(工：塩崎一郎)
「日本経済新聞でビジネスを語る」	(産：大田住吉)
「夢をカタチにする土台づくり」	(産：小沢貴史)
「宮沢賢治を読む」	(教：武田修志)
「西洋史読本」	(教：武田元有)
「ゲーデルの『不完全性定理』を読み解く」	(教：田畑博敏)
「メディアとしてのボードゲームを読む」	(教：大谷直史)
「20世紀初頭の科学革命を読む」	(工：早瀬修一)
「国語の重要性を考える」	(工：南条真佐人)
「闘病記を読む」	(医：深田美香)

●鳥取県連携講座「くらしの経済・法律講座」開講

全学共通教育には学外講師のオムニバス講義がありますが、こうした授業の運営に不可欠な世話役は教育センターの専任教員が担当しています。今期は主題科目「くらしの経済・法律講座」が開講中ですが、筏津教授・桐山准教授が世話役としてガイダンスや毎回の講師紹介など、円滑な授業運営に努めています(=写真)。なおこの科目は鳥取県連携講座として一般にも開放され、今期は毎回80-90名の市民が受講を申し込んでおり、本学の社会貢献としても重要な意味をもちます。



●進化する教育センターのホームページ

教育センターでは、昨年12月よりHPの充実に向けて更新を続けています。まだまだ“発展・進化中”ですが、教育センターをよりよく理解して頂けるよう努力しております。昨年までのHPと、次の五つの点で大きく進化しています。

- ①動きのあるページ(スライドショーの活用等)
- ②教員紹介ページの充実(名前だけのリストから“顔”や“ひと”の自由な表現へ)
- ③プルダウンメニューにより、クリックの手間の省略(カーソルを置くだけで下位項目がわかり、スムーズに別ページに移動可能。ページ存在に気付き易くなる点で大きな効果)
- ④鳥取大学の学生のための「英語学習応援ページ」の新設(自主学習の応援ページ。3月11日のオープンより、500人以上がアクセス)



⑤随所へのカウンター設置による訪問者数の把握

今年1月24日より教育センターHP訪問者数は5月10日現在で2,100を超えています。HPの訪問者数を把握しながら、今後の展開に生かしていきたいと思っています。

紙面の都合上これらの項目についての詳細は別の機会にゆずりますが、一度アクセスしていただき、ご意見等いただければ幸いです。

日々更新、進化を続ける教育センターのホームページ。新企画等々、乞うご期待!

※教育センター HP: <http://www.uec.tottori-u.ac.jp/>
(HP管理・運営: 福安・石川・小林(昌))

教育開発部門の活動

●第16回大学教育研究フォーラムに出席して

第16回大学教育研究フォーラムが3月18日(木)・19日(金)の両日、例年通り京都大学・吉田キャンパスで開催されました。以下フォーラムの内容、全国の大学改革の動きを報告します。

第1日目と2日目の個人発表は、昨年の1.5倍の66件でした。分野も、昨今のFD義務化による各大学の取り組みを反映して、教育評価、カリキュラム研究、授業研究、授業公開研究、e-ラーニング、学生生活など、多岐に及んでいます。また、ドイツや台湾からの報告者もありました。筆者は、1日目は、プログラム・ナンバーD-2のFD・授業公開研究会に出席しました。新潟大学の津田純子氏による、ドイツを中心とするヨーロッパでの大学改革でも「学習者中心」という「視点の転換」が進み、「よい教育」は学び伝達されることが再確認されている、という報告が印象に残りました。「教授から学習へ」という教育のパラダイム・チェンジが世界規模で進んでいると思われれます。続く小講演では、「未来のファカルティをどう育てるか」という題で、京都大学の出口康夫氏が、オーバードクター問題解消に端を発して若手研究者たちの講義実践による「教育トレーニング」を開始した、という発表を行いました。この発表には、本学で新任教員FD研修会を実施する際に押さえておくべきポイント(授業経験の無い新任教員にどうアドバイスするか)が多く含まれていると感じました。

1日目の午後は特別講演とシンポジウムが行われました。特別講演では、京都大学の松下佳代氏が「大学教育のコモンズ」をキーワードに、地域・全国レベルでの授業改善のネットワーク作りの実践報告を行いました。シンポジウムでは「教える集団をどう組織化するか」と題して、4人の報告者が、大学全体の管理運営と改革(愛媛大学長

・柳沢氏)、全学授業公開制度によるFD実践(流通科学大学・南木氏)、教育学部でのFDとカリキュラム改革実践(三重大学・根津氏)、FD活動の動向(文科省・義本氏)という観点から報告し、質疑応答がなされました。なお義本氏の話では、学部・学科レベルでの「教育情報公開」が平成22年度中に義務化(法制化)されるそうです。

2日目午前の個人発表の部では、D-3:FD・授業公開研究会に出席しました。京都大学・宮野公樹氏の学生とのコミュニケーションを中心とする「研究室運営」に関する実践報告と、東京農工大・加藤由香里氏による「授業改善のための教員相互参観システムの運用」の実践報告を興味深く聴きました。続く小講演「組織としての教育力:個人の名人芸で終わらせないために」では、大阪府立大学の高橋哲也氏が、府立大での教育改革の責任者としての経験・実践の報告を行いました。これも教育に関するマネジメントをどうするかについて多くのヒントを与える講演でした。

全体として感じたことは、「花火を揚げる」ようなイベント的FD活動ではなく、学生の力を伸ばす実質的FDを各大学の教員が模索し始めているということです。(部門長:田畑博敏)

大学教育研究フォーラム参加の勧め

平成22年3月18日(木)・19日(金)、京都大学・吉田キャンパスで行われた、第16回大学教育研究フォーラムに参加しました。特別講演「大学教育の実践知を共有する」およびシンポジウム「教える集団をどう組織するか」(1F百周年記念ホール)をはじめとして、個人研究やラウンドテーブル企画(吉田南構内1号館・総合館)など多彩な研究報告があり、活発な意見交換が行われました。それぞれの大学および個人により得られる貴重な情報を得る、絶好のフォーラムであり、これを読まれているみなさまも今後は是非参加され、情報を得られることをお勧めします。

(後藤和雄)

●鳥取大学FD講演会

平成22年3月24日(水)にFD講演会を開催しました。今回のFD講演会は、下記の通り3部構成とし、本学において平成20年度に策定した「学位授与の方針」等3つのポリシーの周知を主たる狙いとししました。

また、FDが教員目線から学生目線に変遷しつつある現状を踏まえ、学生支援において先進的な取り組みを行っている山形大学・エンrollmentトマネジメント室の福島真司教授をお迎えして第

2部の講演をお願いしました(=写真)。多彩なデータを元にした学生支援のあり方は非常に参考となるものでした。

近年、FD講演会は、FDの実効性等において、FD研究会やワークショップに一步譲るということを目にしますが、大学教育の潮流を限られた時間内で効率的に捉えられることが講演会の利点でもあります。今年度も引き続き講演会の企画・開催を行っていく予定です。

記

- 第1部 学士課程教育の構築に向けて
- 第2部 山形大学の取組みについて
- 第3部 本学の「三つの基本方針」について

(桐山 聡)



●新任教員FD研修会

平成22年度最初のFD活動として、4月26日(月)に新任教員FD研修会を開催しました(=写真・次頁)。対象となったのは、過去2年以内に本学に着任された教員で、まだ新任教員FD研修会に参加していない方々でした。

内容は、3部構成として、第1部と第3部は、大学教育を取り巻く状況というマクロな視点からの解説を行い、第2部では、授業における教示スキルに重点をおいた解説とグループワークを行いました。参加者の皆さんからの感想は、下記にまとめています。

新任教員向けという趣旨で企画した研修会ですので、今回参加できなかった方々のために、前期にもう1回開催する予定です。

(田畑博敏・桐山 聡)



【本研修会を受けてみて良かった点】

- DP、CP、AP等について理解していたとは言いがたいので、説明を受けることができてよかった。「教え方」に関しても誰かに習ったことはないのですが、自分のスタイルが正しいかどうか判断する意味でも良い機会を与えて頂いた。
- 板書の仕方、話し方など基本的で当たり前のことでしたが、改めて重要性を指摘されることで、それらの基本がおろそかになっていたと思いました。
- 授業スキルについては容易に取り入れられそうな方法が参考になった。
- 今後必要となるであろう講義を行う上での重要なポイントが整理できてよかった。大学の取り組みもよく分かった。
- 開催時期、時間ともに適切である。内容も、オーソドックスであるが、良い内容である。
- ミニッツ・ペーパーは使ってみようと思った。
- GPAの話など、考えさせられることが多かった。しかし、大学評価ということを考えてどこまで客観的な指標になるか疑問である。これにとらわれると予備校に成り下がるだろう。

【本研修会を受けてみて良くなかった点】

- 講義の方法として、グループ課題等の例があったのは良かった。
- 正直、分かってはいるけれども実際に講義の中で実行するとなると...ということが多い。具体例を挙げて頂くと助かる。
- 全般的に発想が非常に文系的。理工系の現状に即していない印象があった。
- もう少し、研修を受けている教員同士のコミュニケーションが促される形式が増えると良い。
- 講義方法の良い例をしっかりと紹介して欲しい。また

アンケート結果の悪い例も紹介して欲しい。

- 理事の話はあまりFDと関係ないのでは、と感じました。鳥取大学のデータを用いたのが多くなればよいと思います。
- FD合宿、FD講演会と全く同じ話である。貴重な時間を使って来ているので、重複しない内容にしてほしい。東大の例を一般論にされると違うと思う。鳥取大学の学生気質、それに対して具体的にどのような手法が有効かを示してほしい。

【今後、FD活動で企画・実施してほしいもの】

- より専門的な科目に対する教え方（これだけは教えなければならないということが決まっており、かつかなりの分量である）について取り上げて頂きたい。
 - 講義の評価が最も高かった教員による教え方のコツの伝授・講習会を開催してはどうでしょうか？
 - 学校の枠にとらわれず、企業での指導者養成を行っている人の講演を体験してみたい。
 - 授業評価アンケート実施による学習到達度向上への影響・評価について。（難しい内容をカットして平易な内容にすればアンケートは良くなるが、本学では、学習向上にアンケートがうまく機能しているかを検証して説明してほしい。）
 - 教養教育ではなく実学や専門の授業に適したFDを提示してほしい。大人数講義（120人とか150人）に適したFDを提示してほしい。
 - 「中堅教員向け研修会」のようなものも期待する。
- 【その他の意見・要望】
- 人間力の意味についていまだ考え続けています。
 - 授業評価などのシステムを教員の負担が少ない形で実現できるネットワークを確立できると良い。
 - GPAについてはもうすこし説明があってもよい。

●各種全学WGとの連携

教育開発部門では学内の各種WGと連携し、全学規模の様々なプロジェクトに参加しています。

①試行2年目となる医学部・医学科の米子地区6年一貫教育に関する検証作業については、平成21年7・9月の学生（2・3年生）・教員向けアンケートに引き続き、平成22年1月に1年生向けアンケート・面談を実施、年度末に以上の調査結果を集計・報告しました。

②授業評価アンケートの見直しに関しては、鳥取地区三学部の教務担当副学部長と連携して現状と課題を分析、新たな中間アンケートの実施を盛り込んだ改革原案を作成しました。

③明治大学・鳥取大学・鳥取県の連携事業に関しては、教育面での連携の一環として、全学共通科目の枠組における教員相互派遣の可能性とその意義・効果について検討を進めました。今のところ全学共通科目の特定科目「鳥取学」（オムニバス）のなかで、明治大学の教員数名をメンバーに加えた授業編成を企画中です。

外国語部門の活動

● CALL の新教材導入が完了

平成 22 年度の CALL (コミュニケーション英語 B) にむけて導入作業を行ってきた新教材・アルク社の NetAcademy2 (スーパースタンドコース: 新 TOEIC 対応) の設置作業が完了し、3 月 5 日に関係者を集めてデモンストレーションが行われました。新学期開始とともに新入生が授業で使用しており、英語学習全般、TOEIC 対策等に多大な効果を発揮することが期待されています。

● 教育研究高度化のための支援体制整備事業が終了

教育研究高度化のための支援体制整備事業によって、英語アドバイザー (2 名) およびプログラミング担当のシステム・エンジニア (1 名) が行ってきた支援事業が 3 月 19 日をもって終了しました。英語アドバイザーの業務実績としては、講義ノートや工学研究科シラバスおよび卒業証明書 (および証明書に関するパンフレット) の英語への翻訳、さらに教育センター・外国語部門との連携によるインターネット上の英語教材用テキストの収集、他大学の使用教材調査、CALL 教材 (ALC 社 Net Academy の試験問題作成)、教育センター英語学習ホームページの作成などがあります。また、システム・エンジニアの業務実績に関しては e-learning 用問題の作成・採点システムの構築などがあり、これらの成果の今後の有効利用が期待されています。

● 平成 21 年度・学長経費プロジェクト『学力差に応じた英語学習ソフト導入と教材開発のための予備調査』が完了

本年度から TOEIC 試験が年 2 回実施 (5 月、12 月) となり、1 年次後期からレベル別クラス編成が可能になりました。さらに、2 回の TOEIC スコアを比較することによってその学習効果を具体的な数値で表すことも可能になりました。プロジェクトの報告書では、1 年生全員の 2 回の TOEIC スコアをレベル別に比較して、学習者のモチベーションと学習効果の関係について分析しています。その結果、300 点未満の学生はハードルをクリアするために意欲的に学習する傾向がある一方で、高得点層ではモチベーションの欠如からスコアが向上しない傾向があることが明らかになりました。

● 平成 22 年度・学長経費プロジェクト『学力差に応じた TOEIC 強化クラスの設定とその効果の検証』が採択

平成 22 年度学長経費 (教育・研究改善推進費)

に申請していた『学力差に応じた TOEIC 強化クラスの設定とその効果の検証』が採択され、4 月 1 日から新プロジェクトがスタートしました。今回は、21 年度に行った学力差に応じた英語教育の実績を踏まえ、2 年次の総合英語の最上位クラスを中心として TOEIC 強化クラスを実験的に導入しようとするものです。これらのクラスにおける教育効果は、今年度から初めて実施される 2 年次 TOEIC 受験で検証する予定で、TOEIC 強化クラスとして後続のモデルケースになることが期待されています。 (部門長: 筏津成一)

● 「センター英語学習」ホームページ開設

外国語部門では、鳥取大学の学生の自主的英語学習を応援するため、「センター英語学習」ページを新設いたしました。ここでは、BBC (イギリス) や VOA (アメリカ)、NHK など多くの「英語学習サイト」を集めています。テーマ、レベル、分野等に沿った学習が可能であり、音声、映像、文字の媒体を用いて飽きることなく英語に親しむことができます。また、その日のニュースやブログにアクセスすることも可能です。興味深い個々のニュースやブログを随時紹介していくことも計画しています。もちろん、「センター英語学習」からは、アルクの「スーパースタンドコース」や「PowerWords プラス」、「e-sia」へアクセスし、英語のトレーニングをすることもできます。教員側で世界のサイトの中から英語学習ページを収集・選択し、一括して、「センター英語学習」ページとして学生に提示することは、学生の資料選択の時間を省くという点で学生への便宜となっています。また学生は「センター英語学習」から「教育センター (教員)」にアクセスしメールで質問もできます。現在、さらに質問をやすくする方法を検討中です。

今年 3 月 11 日にオープンして以来、2 カ月で 500 人の訪問者がありました。 (福安勝則)



健康スポーツ部門の活動

●スキー実習の実施

平成 21 年度のスキー実習を 2 月 28 日－3 月 3 日に長野県・志賀高原スキー場で実施しました（＝写真）。34 人の学生が参加しましたが、スキーの基本技術の習得に好都合な晴天に恵まれたため充実した実習が行えました。また、スキーの本場の雰囲気をも十分に堪能できました。



●トレーニングルームの使用方法説明会

平成 22 年度第 1 回目のトレーニングルーム使用説明会を 4 月 19 日（月）・22 日（木）の両日トレーニングルームで実施しました。

●附属学校園における教育支援活動

昨年度に引き続き附属小学校低学年児童を対象とした「キッズスポーツアンドスタディサポート」と高学年児童を対象とした「陸上教室」を 5 月中旬より開始します。

●講演等による地域貢献活動

鳥取市教育員会の主催による「小学生のスポーツ活動を考えるフォーラム」に、パネリストとして参加しました。当日は、鳥取市内のスポーツ少年団に所属する団体の指導者及び保護者の他、学校教員など 200 名余りが集い、少年スポーツの現状と今後について話し合いました。

また、総合型地域スポーツクラブ育成委員会（兼：とっとり広域スポーツセンター企画運営委員会）に参加し、座長として地域スポーツクラブの育成に関わる問題について、議論をとりまとめました。

その他、「鳥取県公認トレーナー養成講習会」、「気高町バレーボール協会指導者研修会」にて、トレーナーや指導者として選手や生徒と関わる人材が理解しておくべき専門的知識について、講演を行いました。

（部門長：福元和行）

教職教育部門の活動

●教職教育部門の任務

本年度より、教職教育部門が新設されました。この部門は旧生涯教育総合センターの教職教育部門の任務、及び生涯教育部門の任務の一部を引き継いでいます。具体的には、本学の教員養成カリキュラムの開発・充実、教員免許状更新講習の企画実施、教員等に関する研修支援、また教育相談の実施など教育臨床に関わる実践と教育、部門に関連する課題についての調査・研究および社会貢献などをその任務としています。

3 月までの活動は、「生涯教育総合センターだより」に掲載しましたので、ここでは 4 月期の活動を報告しておきます。

●教職教育に関する活動

教職教育に関わっては、教職相談室を開設するとともに、県教委と連携して実施している学校教育ボランティアのための事前講習・案内を行いました。また、3 年後の「教育実践演習」に向け、教免取得者の登録制度、履修カルテ開発の在り方の検討を進めています。なお、4 月 15 日（木）には、介護等体験オリエンテーションを実施しました。

教員免許状更新講習の実施に関しては、受講者の募集を開始しました。昨年の政権交代によって、講習の廃止が取りざたされていたため、受講控えが懸念されましたが、出足は順調のようです。

●教育臨床に関する活動

教育臨床分野の活動としては教育センター別館 2F 療育研究室にて発達障害のある子どもさんの個別療育を開始しました。教育臨床心理学を専攻している大学院生が中心になって定期的に対人関係能力を高める練習課題やワークを実施しています。また、春休みをはさんで附属学校生徒を含めたカウンセリングを「外来相談」として受け付け、新学期への準備を支援してきました。一方、鳥取県福祉保健部の研修会（4 月 28 日）にて「刑務所を出所した障がい者支援」と題して講演し、今年度新設が予定されている地域定着支援センターの必要性について相談事例より解説いたしました。なお、4 月より地域学研究科社会人大学院生のために「教育臨床心理学特論」講義を毎週火曜午後 6 時～夜間講義として開設しています。

（部門長：山根俊喜）

《連載》FD講座

～第2回～

授業アンケートについて

教育開発部門：桐山 聡

本学では「授業アンケート」を全学で実施しています。本学に限らず授業アンケートを実施している大学は多いのですが、統一的なフォーマットは存在していません。これは、大学のあり方、学生の気質等が多様化していることを表しているともいえます。

さて、「授業アンケート」の結果については、十分注意を払う必要があります。まず、数値化された結果からは、学生の真意は正確には読みとれません。そのため補足的に自由記述欄を設けているのですが、全ての学生が書いてくれるわけではありません。また、アンケートの設問も全授業を対象とした最大公約数的なものとなっていますので、アンケート結果の数値が低いからといって、即座に良くない授業だと断言することもできません。そもそも、学生に授業を評価する能力があるのか、という議論も存在します。

「授業アンケート」は、本来学生と教員との間のコミュニケーションツールの一つでしかありません。教員の皆さんが、授業をもっと良くしたいと考えているのなら、アンケート以外にも、ミニツ

ツペーパーやミニレポート等のコミュニケーションツールを試してみたいか、という議論も存在します。



教育センター関係教員（○は部門長、*は兼務教員）

センター長：本名俊正

教育開発部門：○田畑博敏、吉野 公*、後藤和雄、石川雅雄、井上順子、永松利文、桐山 聡、武田元有

外国語部門：○筏津成一、福安勝則、武田修志、サージャント・トレバー、松本雅弘、和田綾子、小林昌博

健康スポーツ部門：○福元和行、上野耕平

教職教育部門：○山根俊喜*、小林勝年、柿内真紀、大谷直史

※ 外国語部門、健康スポーツ部門、学生生活支援部門、附属学校連携部門の兼務教員は割愛しています。

教育センター出版物のご案内（目次より抜粋）

『教育センター広報アゴラ』No. 30（2010年4月）

新入生歓迎特集

とりりんがゆく——とりりん筋トレに励む！——

『大学教育研究年報』第15号（2010年3月）

特集1 入学センターの取組

特集2 大学の授業評価と授業改善

『わかりやすい講義をめざして』（12）（2010年3月）

「教授」から「学習」へ——FDの一層の充実に向けて
新任教員FD研修会を実施して

FD合宿研修会

学生（新入生）と学長との懇談会記録

授業評価アンケート結果（20年度後期・21年度前期）

とりりーまん川柳

一、廃棄品 向かいの先生も 狙ってる

二、5分だけ なのに気がつきや

ゆとりあり

三、GW 終わって始まる WG

【評】一句、廃棄品は宝の山。二句、休憩時間の延長。逆に一限開始はゆとりなしか？ 三句、黄金週間と作業部会。

※このコーナーでは教育活動・大学運営にまつわる教職員の川柳を随時募集します（宛先は下記）。



編集・発行 鳥取大学教育センター広報誌編集委員会

電話：0857- 31- 6775（内線 2485）

E-mail：k-morimo@adm.tottori-u.ac.jp